

シカゴ・モノグラフにみる調査法

中 野 正 大*

Research Methods in the Chicago Monographs

Masataka NAKANO

要 旨

本稿は1920～30年代にかけてシカゴ大学出版会から次々と出版されたいわゆるシカゴ・モノグラフに焦点をあてて、そこで駆使された調査法、多角的調査法について考察する。そこではまずシカゴ・モノグラフの代名詞ともなっているエスノグラフィーの代表例としてゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』を取り上げて実際にどのような調査法が用いられているかをみる。また参与観察を用いた代表的モノグラフといわれるクッレシー『タクシー・ダンスホール』を見ることによって、そこでの調査法としての参与観察の占める位置を考察する。ついでフィールドワークを伴わないモノグラフとしてマウラー『家族解体』の場合を考察する。最後にこうしたシカゴ・モノグラフで用いられた調査法の問題点を検討する。

はじめに：シカゴ・モノグラフとは

1920年代から1930年代にかけてアメリカのシカゴ大学出版会から社会学のモノグラフ研究が次々と出版された。これら一連のモノグラフは、1892年アメリカで初の社会学部を開設したシカゴ大学で学ぶ大学院生によって、この時期の教授、パークとバージェスの二人の共同指導のもとで書かれたものである。

1914年、黒人教化事業の指導者、ブッカー・T.ワシントンの主宰するアラバマ州にあるタスキーギ学院からシカゴ大学に赴任したパークは、早くもその翌年に書かれた都市社会学の記念碑的論文「都市：都市環境における人間行動のための若干の提案」において都市を研究対象にすることの意義と重要性を指摘した。こうするなかで1920年からフィールド・スタディ・コースが開設されたのを機に、この授業科目をシカゴ大学出身のまだ若き同僚のバージェスと共同で受け持ち、急激に膨張するシカゴ市を社会的実験室として集中的に調査を開始する。そこで学ぶ大学院生達はこうした調査に従事してゆくなかで観察され収集されたデータを学期末に提出する「ターム・ペーパー」(term paper)と呼ばれる研究レポートにまとめるものもあらわれた。さらにこれらターム・ペーパーをもとに修士論文、さらには博士論文に発展させるものもあらわれる。さらにこれらの学位論文が著書として出版されるものも出てきた。

平成23年9月24日受理 *社会学部教授

こうしたパークやバージェスの学生指導からターム・ペーパーにまとめられ、それをもとに学位論文、さらには著書として出版されるプロセスの一端をよく伝える記述がある。それは1920年代にシカゴ大学に学び1923年、「ホテル・ライフの社会学」という題目で博士論文をパークの指導のもとでまとめ、それをもとに1936年、『ホテル・ライフ』というタイトルで出版したノーマン・ハイナーの残された日記である。このハイナーの日記が当時、パークとバージェスの同僚教授であったフェアリスの息子で自らもシカゴ大学で学び当時の状況を語っている彼の著書『シカゴ・ソシオロジー：1920-32』のなかで紹介しているのでそれを見よう。

1921年バージェスの指導のもとで修士論文を書き終えたハイナーはパークの授業で移動性と余所者の問題について話を聞いてパークの指導を受けることになる。

10月13日、社会学部の教員と大学院生から構成される社会調査研究会でパークの発表を聞いた翌日、パークと面談して研究テーマを「シカゴのホテル生活者・ハウジング問題の1側面」として提出する。

翌年1月6日にはかねてからパークと約束していた中心的業務地区の調査が行われた。その作業は午前9時から午後5時30分まで続けられ、「シカゴ不動産協会」や市立図書館での資料収集もあわせて実施された。

「昼食のあとパークは彼のライフヒストリーを話してくれた。」

冬学期で履修した3つのコースのターム・ペーパーとして「ホテルにおける女性の娯楽」「人口規模と移動性にもとづくホテルの分類」「63番街とコテージ・グローブ・アベニューにみられる周辺部の移動性にかかわる諸センター」の3本の研究レポートを提出する。

4月に入ってハイナーは学位論文の作成に向けて本格的な作業に入り始めた。

5月23日になってハイナーは学位論文の序章として「都市生活の指標としてのホテル」の草稿を書き上げた。

ハイナーの学位論文は1923年に受理され、パークはそれに高い評価を与え、その出版を奨めた。ハイナーはこの学位論文をさらに発展させ充実させて、1936年『ホテル・ライフ』と題してシカゴ大学出版会ではないが、ノースカロライナ大学出版会から出版された。このようにシカゴ・モノグラフは学期末のターム・ペーパーからそれをもとに学位論文になり、さらに著書として出版されたのである。

だがシカゴ大学出版会の社会学叢書の第一巻として出版されたネル・アンダーソンのホームレスの調査研究、『ホーボー』だけは例外で、この出版されたモノグラフを修士論文として扱った。¹⁾

こうして出版されたモノグラフにはそれを指導したパークとバージェスの紹介と序文が寄せられている。これら一連のシカゴ・モノグラフとそこに付されたパークとバージェスの序文と紹介を検討したディーガンによれば、これまでパークには体系的理論がないといわれているが、これらモノグラフはパークとバージェスの理論的タペストリーが織られたものであり、そこには主要な理論的議論が位置付けられているという。²⁾

さて、これら一連のモノグラフで扱われた調査対象は表1にみられる題目から窺えるように、ホーボー（アンダーソン）、売春（レックレス）、スラム（ゾーボー）、ギャング（スラッシャー）、非行少年（ショウ）、自殺（キャバン）、組織犯罪（ランデスコ）、タクシー・ダンスホール（クレッシー）、ゲットー（ワース）、家族解体（マウラー）黒人家族（フレンジア）などまさに様々である。これらのモノグラフの多くはフィールドワークにもとづいて書かれたものであるが、必

表1 シカゴモノグラフーシカゴ大学出版会社会学叢書

- 1923 Nels Anderson, *The Hobo*
- 1927a Frederick M. Thrasher, *The Gang* (rev. 1936)
- 1927b Lyford P. Edwards, *The Natural History of Revolution*
- 1927 E. R. Mowrer, *Family Disorganization*
- 1928a Louis Wirth, *The Ghetto*
- 1928b Ernest T. Hiller, *The Strike*
- 1928 Ruth Shonle Cavan, *Suicide*
- 1928 Vivien M. Palmer, *Field Studies in Sociology : A Student's Manual*
- 1929a Hervey Warren Zorbaugh, *The Gold Coast and the Slum*
- 1929b Frances R. Donovan, *The Saleslady*
- 1929 Ernest W. Burgess (ed.), *Personality and the Social Group*
- 1930 Clifford R. Shaw, *The Jack Roller*
- 1931 Clifford R. Shaw in collaboration with Maurice E. Moore, *The Natural History of a Delinquent Career*
- 1932 Pauline V. Young, *The Pilgrims of Russian Town*
- 1932a Albert Blumenthal, *Small-Town Stuff*
- 1932a Paul G. Cressey, *The Taxi-Dance Hall*
- 1932c Edward Franklin Frazier, *The Negro Family in Chicago*
- 1932 E. R. Mowrer, and Harriet Mowrer, *Domestic Discord*
- 1932 E. R. Mowrer, *The Family*
- 1933 Heinrich Kluver, *Behavior Mechanisms in Monkeys*
- 1933 Walter C. Reckless, *Vice in Chicago*
- 1934 Charles S. Johnson, *The Shadow of the Plantation*
- 1935 Harold F. Gonsnell, *Negro Politicians*
- 1937a Everett V. Stonequist, *The Marginal Man* (New York : Charles Scribner's Sons)
- 1937b Bertram W. Doyle, *The Etiquette of Race Relations in the South*
- 1937c Romanzo Adams, *Interracial Marriage in Hawaii* (New York : Macmillan)
- 1938 Andrew W. Lind, *An Island Community*
- 1938 Ruth S. Cavan and Katherine H. Ranck, *The Family and the Depressions*
- 1938 Clifford R. Shaw, Henry D. McKay and James F. McDonald, *Brothers in Crime*
- 1939/1951 Edward Franklin Frazier, *The Negro Family in the United States*
- 1939 Robert E. L. Faris and H. Warren Dumas, *Mental Disorders in Urban Areas*
- 1940 Hellen MacGill Hughes, *New and the Human Interest Story*
- 1940 Nels Anderson, *Men on the Move*
- 1942 Donald Pierson, *Negroes in Brazil*

ずしもそうでないものもある。

多角的調査法とは

だがこうした多様な主題が扱われているにもかかわらず、これらのモノグラフにはいくつかの共通した特徴がみられる。それは既に別稿で指摘したように（１）彼らの指導教授であったパークの提唱した人間生態学とバージェスの同心円地帯理論、（２）トマスとズナニェッキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』を貫く視点、社会解体論、（３）調査対象にたいして各種の技法を駆使してその実相に迫る多角的調査法である。³⁾

そこで本稿ではこのうち（３）の特徴、シカゴ社会学者によって駆使された多角的調査法を取り上げる。というのはこの多角的調査法によって描かれたモノグラフをみて、人は「シカゴ・スタイル」とか「シカゴ・アプローチ」とかあるいは「シカゴの伝統」という言葉で呼び、そこにシカゴ学派の特質をみただけである。

トマスとズナニェッキの『ポーランド農民』以降、すべてのシカゴ社会学を貫く糸は事実上経験的調査であるといわれる。⁴⁾ そこでは生活史法という一つだけの技法で非行少年の世界を描いたショウの作品『ジャック・ローラー』は別として、あらゆる調査技法を組み合わせる調査対象に迫る手法がとられている。つまり参与観察法やインフォーマル・インタビューや生活史や日記、手紙などの個人的ドキュメント、あるいは新聞記事や裁判記録、福祉事務所や土地・建物の登記所などの社会機関からのドキュメント、さらには人口標準地域のデータや人間生態学モデルにもとづくドット・マップなど利用できるものは何でも利用して調査対象に迫るやり方である。

それはしばしばシカゴ・スタイルとかシカゴ・アプローチと呼ばれ、シカゴ・モノグラフに見られる際立った特徴だといわれる。こうした各種のデータ収集の技法を組み合わせる調査法は、今日「多角的調査法」(multi-method)、「混合的方法」(mixing method)、「トライアングレーション」(triangulation) と呼ばれ、それはそれぞれの技法の弱点を補強しあうとともに、それぞれの技法のもつ長所をより有効に生かして行こうとする発想にもとづく調査法だといわれている。シカゴ学派の伝統を受け継ぎ、シカゴのニア・ウエストサイドにあるアダムス地区と呼ばれるスラム街のフィールド調査にもとづいて書かれたモノグラフに『スラムの社会的秩序』がある。この著者として知られるサトルズはこうした各種の調査技法をミックスしたまさに多角的調査法を「なりふり構わない折衷主義」(shameless eclecticism) とよんでいる。⁵⁾ これこそがシカゴ・モノグラフの調査法の特徴である。

多角的調査法の実例：ゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』

それではこれからいくつかのモノグラフを実際にとりあげて、そこで用いられた多角的調査法の実例を見てみよう。まず、最初にとりあげるのは、こうした多角的調査法の特徴をもっともよく表しているといわれるゾーボーの『ゴールドコーストとスラム』(1929) である。

このモノグラフは図1-1・2に見られるシカゴの中心部、ループの北東側に位置するニア・

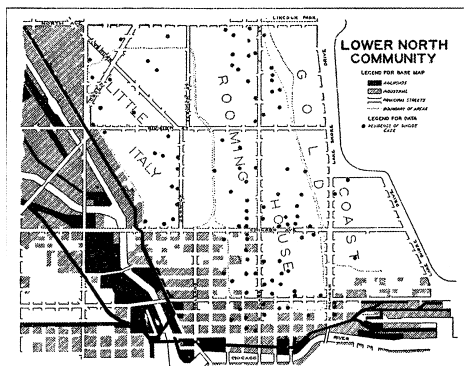


図1-2 ニア・ノース・サイドの地図と自
殺者の居住分布

このように東はミシガン湖、西と南はシカゴ河に囲まれたわずか奥行きが1マイル半、幅1マイルぎりぎりの範囲しかないニア・ノース・サイドは、1か月千ドル（当時）もの家賃がする、シカゴで最高の金持ちが住むところとして有名な「ゴールド・コースト」から、それにすぐ隣接して1か月6ドルの家賃のごみごみした地下室の部屋でイタリア人家族が暮らす「リトル・ヘル」と呼ばれるシカゴの貧困が最も集中している地区までもを包摂している地域である。

このようにニア・ノース・サイドはゾーバーが表現したように「まばゆいばかりの光と影の地域、つまり古いものと新しいもの、土着の人と外国人というだけでなく、富裕と貧困、悪と尊敬、因襲的なものとボヘミア的なもの、労苦と困苦というあざやかな対照からなる地域だけでなく両極の地域でもある。だがニア・ノース・サイドはゾーバーの著書の題名のような高級住宅地区ゴールド・コーストとスラムの2つの地域に分かれているのではなく、実際にはこの両極端ともいえる2つの地域の間にはいわば中間的ともいえる地域がある。それは下宿屋（rooming house）や間貸し屋（lodging house）が多くみられる貸部屋地区と「荒廃したビルに、風変わりなレストラン、面白いアート・ショップや本屋、喫茶店、『貸しスタジオ』と記した窓に住所カードやフラワー・ボックスのある小部屋や屋根裏部屋がひしめきあっている」タワータウンとよばれるボヘミア地区である。こうした中間地区からさらに社会解体の進んだ地区が「暗黒街の中心地」と記されたノース・クラーク・ストリート界限とニア・ノース・サイドの西南地域つまりウェルズ・ストリートから西、シカゴ・アベニューから南へ広がる地域のスラム地区、そして「轟音を響かせる高架の西」に位置する「リトル・ヘル」と知られるリトル・シシリー地区である。

ゾーバーはこれらニア・ノース・サイドを構成する6つの地域、パークが呼んだ「自然地域」（natural area）の様相を「科学者というよりはリポーター」と評されるぐらいビビッドに描写して行く。

シカゴの高級住宅街、ゴールド・コーストについては、「成功した者」たち、つまり社交界のリーダーたちによって名誉と名声を求めて繰り広げられる「社交ゲーム」や社交儀礼の様子がそこに住む住民からのドキュメントを利用して描かれている。その一端を見てみよう。このドキュメントはある社交界婦人が社交儀礼について半ばユーモラスに半ば真面目に語った話の内容である。

確固とした社会的立場にいないかぎり、ノース・アベニューの北側やノース・ステート・ストリートの西側に住んではいけません。またどの街区に住むかについても十分気を配らなくてはなりません。もしホテルに住まざるを得ないのであれば、ドレイクかブラックストーンかレイク・ショア・ドライブかアンバサダーかピアソンにすべきです。それ以外のところに住まうのも珍しくありませんが、一考すべきです。というのも、良くないところや良くないホテルに住むだけで、望ましくない人物とみなされてしまうからです…。⁷⁾

次いで下宿屋と間貸し屋が多数存在する貸部屋地区は「流動的で匿名的な個人本位の世界」だという。こうした特徴をもつこの地区を『イリノイ州間貸し屋登録簿』（Illinois Lodging House Register）や下宿屋の住人とのインタビュー記録、さらには純真な田舎育ちの娘がシカゴに出てきて身を持ち崩して愛人生活をするまでに転落したふしだらな娘（charity girl）のライフヒスト

リーを原文で6ページも割いて描写する。その最初の書き出しの部分のみてみよう。

カンザス州エンボリアは、22歳まで私の故郷でした。私の父はそこで小さな商売を営んでいました。父は真正面で信心深い人でした。・・・私は小さな頃から音楽のレッスンをうけていました。まさにこの音楽のレッスンとの関わりで私の人生物語は展開します。・・・大学の4年間を通じて私の大志は眠っていませんでした。そして私は大学の卒業証書を貰ったその日に、家に手紙を書き、エンボリアにもどって「バビットのよう人間」と結婚し、「メイン・ストリート」に住むより、シカゴに行って音楽の勉強をします、と伝えました。…父はびっくりし、私のシカゴ行きを厳しく咎め、お金は一銭も送らないぞといいました…。母はほとんど何もいいませんでした。私が出立するときに、私の手に母が私に新しい服を買うために置いてくれた50ドルを握らせてくれました。…決して忘れもしないあの夜、私はノースウエスタン駅に着き、一方の手に財布をぎゅっと握りしめ、他方の手にバックを携えながらも駅の赤帽を断り、明かりのまぶしさにどきまぎ目をくらまさせていました。でもその一方では心は躍り野心は燃え立ち、それはまさに約束の地への門口でした。私は旅行案内所に行き、YMCAにゆくにはどうしたらよいか尋ねました。…最初の数週間は魔法のように過ぎてゆきました…。⁸⁾

1871年のシカゴ大火はシカゴの市街を灰塵に帰したが、そのなかでただ一つ焼け残ったのがノース・ミシガン・アベニューに今でも残る給水塔である。この周辺境界が「タワータウン」とよばれ、シカゴのラテン地区の「村」、ボヘミアである。こうした村の住人、画家、彫刻家、作家、芸術家志望の学生の状況を活写する。

そこではある学生の日記を引用してタワータウンのスタジオや喫茶店に出入り人々の型破りで風変わりな生活や彼らのパーソナリティを次のように伝えている。

10月10日。Fとともにイースト・チェスナットにあるMの部屋に行った[Mは詩集雑誌の発行者である]。Mはわれわれを2、3軒離れたスタジオに連れて行った。スタジオはいまにも崩れそうな2階建のビルにあり、腐った板張りの道と危険な裏階段を通ってたどり着いた。…われわれは床に座り、タバコを吸いながら話し合った。Rは顔を覆ってしまうほどの長い髪をしていた。Tは「プロのボヘミアン」を雄弁に称賛した。彼は「プロのボヘミアン」を、たとえ仕事がなくともあちこちでわずかな物を拾いながらなんとか生きている人と定義している。彼はつぎつぎと友人の世話になったり、わずかな鉛筆を売ったり、芸術家のごとくちょっとした仕事をしたり、ループ内でパートタイムの仕事を見つけたり、小劇場に出演したりしながらわずかな収入を得ている…。⁹⁾

ニア・ノース・サイドの中心部、ノース・クラーク・ストリート境界は「暗黒街の中心地」(the Rialto of the Half World)と題して、そこに住むホーボー、急進主義者、スクウォーカー、強盗、乞食、売春婦、薬物使用者、金目当ての詐欺師、ジャズ狂、慰安婦といった人たちを描いている。そこでは「酔漢が酒代や賭け事の資金を得ようとして、またブリッジの負けを払うためにやってくる質屋」があり、この質屋を営む主人とのインタビューを通して彼の目から見たこの地域の生々しい世界を次のように記している。

クラーク・ストリートは、世界中の「暗黒街の人々」に知られている。ある分子、すなわちペテン師や俳優、売春婦、麻薬常習者、ホーボーのような短期滞在者や旅行して廻っている人たちはクラーク・ストリートの名を広めている。暗黒街の世界の住民がシカゴにやってくると、彼らはそこで友人や彼らが欲しいもの、必要としているものをみつけることができることを知っているの、すぐにクラーク・ストリートに行く…。¹⁰⁾

「ウェルズ・ストリートから西へ、そしてシカゴ・アベニューから南方ヘラッシュ・ストリートに至るまで、さらにはグラント・アベニューから南へ広がっており、最終的には河沿いの卸売・製造業地区に合流する」スラムの記述では、かつてシカゴの有力ビジネスマンが麻薬を常習してスラムの落伍者となった次のような『麻薬常習者の日記』が引用されている。

1月1日・一日中寝ていた。午後7時起床。憂鬱。行くところもなく、お金もなく、友達もいない。もし私が別の異なる人間であれば、もっとたくさんのお金と友人をもったであろう。ああ、一緒にいる人をもたないことを人はどのように感じるのでしょうか。少量のモルヒネを吸った。ほんのわずかだけだ。素晴らしい夢を見た。私の惨めな思いを取り払ってくれた…。

：

5月2日・今日仕事をみつけなければ。この2日間、コーヒーとロールパンしか食べていない。今はわずか5セントしかもっていない。気が狂いそうだ。

[5月6日、彼はモルヒネを手にするために万年筆を質に入れた。次の記録は鉛筆で書かれている。…5月28日、9粒服用して最後の記録を残した。そこには「試みても無駄だ。私はやめることはできない!」と書かれていた。¹¹⁾

ゾーボーはこうしたスラムを経済現象であるとともに社会学的現象だとして次のようにいう。

スラムは徹底的にコスモポリタンな地域である。外国人コロニー、都市的文化、農村的文化、異国風の文化、多様な言語と教義、これらが共存し、混合し、互いに浸透しあっている。さらに外国人コロニーにおいて、とくにブラック・ベルト、チャイナタウン、リトル・イタリーにおいては、すべての人々が肌の色や文化によって凝離している。そこでは、都市の他のどの地域よりも、同じような人々がより多く一緒に生活していることがわかる。ニア・ノース・サイドのスラムは古い文化的継承の歴史をもつとともにそこに28カ国もの外国生まれの人々がおり、際立ってコスモポリタンな地域である。¹²⁾

こうしたスラムに居住するいま一つのグループに少年ギャングがいる。ゾーボーはこのギャングについて本書より2年前の1927年に出版された同じシカゴ・モノグラフ、スラッシャーの『ギャング』の資料を利用してつぎのように述べている。

家族やコミュニティの少年問題への対応の失敗から生じた1つの適応形態である。この失敗はとくに経済的必要性からスラムに凝集した外国人家族や外国人コミュニティの特徴である。こうしたことからスラム、

とくに外国人スラムはギャングランドであるといわれる。しかしそのギャングランドは、子どもが生活でき、願いをかなえることのできる社会的世界を子ども自身が造りだした創造物にすぎないのである。¹³⁾

ゾーボーが概観する最後の地区はリトル・ヘルとよばれる地域である。このリトル・ヘルはヨーロッパからの移民の最初の入植地であったという。それが別名リトル・シシリーとも呼ばれるように、それまで住んでいたアイルランド人とスウェーデン人がこの地域を出て、北の方に移り住んで以降、1903～4年頃からシチリアから大挙してやってきたシチリア人の街と化したという。現在、1万5千人の1世と2世のイタリア人が住むこの地区は、高架の向こうの1マイルも行かないところに高級ホテルのドレイク・ホテルやストリーターヴィルの高層マンションがみえ、南にはやはり1マイルもないほどのところに、リグリー・タワーとループのスカイラインが切れきれに見えるところである。それにもかかわらずこの地区はそれだけで1つの世界を形成しているという。この地区の様子はゾーボーの次の記述だけで十分目に浮かぶであろう。

薄汚れて狭い通り、がらくたが積み上げられて犬やネズミがうろうろしている路地、荷車につながれた山羊、寒々とした借家、霧の中にたちこめている工場からの煙、歩道に沿った市場、異国名の店、通りの異国人の顔、呼び売り人や行商人の耳障りな呼び声、ガラガラ・カンカンと音をたてる鉄道や高架の騒音、立派なカトリック教会から聞こえる鐘の響き、祭りの日のマーチングバンドの音楽や花火のパチパチとする音、時折聞こえる爆弾の鈍い破裂音や銃声、通りで遊ぶ子供たちの叫び声、きれぎれに聞こえる奇妙な演説、煤の味、河のそばの巨大な「ガス・ハウス」から放出されるガスの匂い。ここから吹き出される炎は夜の空を赤く染める。それ故に、この地域はかなり以前からリトル・ヘルと呼ばれ始めた。¹⁴⁾

こうしたリトル・ヘルと呼ばれる地域はその名の通りシチリアの言葉や服装や習慣をそのままここに移してきたような地域である。そこにはマフィアやブラック・ハンドによる暴力や犯罪行為が横行する「死の街角」(death corner)と知られる場所がある、という。だが、こうしたシチリア人のコロニーと化したまさにリトル・シシリー地区にあって、貸し部屋地区やホボヘミアといった他のスラム地域のような無秩序は見られないという。というのはシチリア人の家族の伝統を重んじる心情的態度が根強く残っているからだという。このことはリトル・シシリーでは離婚が全く見られず、遺棄も比較的少ないということにも結びつく。ゾーボーはこうした事実をこのモノグラフのなかで多数利用しているドット・マップによって示している。しかしこうしたシチリア人に見られる家族統制も2世代のアメリカ生活との接触が増えるにつれて、次第に崩壊してきているという。

以上、ゾーボーによって記述されたシカゴのニア・ノース・サイド地域の情景を概観してきた。このゾーボーのモノグラフ、『ゴールド・コーストとスラム』は、出版されるやいなやニューヨーク・タイムズ紙で「本書は社会学者だけでなくますます増大する都市のもつ重要性に関心をもつすべての人たちにとって強い関心と高い価値をもつものであり、あらゆる主要な点でシカゴと同じような他のアメリカの大都市に適用できるものである。」と称賛された。本書はこうした学術出版でありながら当時ベスト・セラーになった。このことは誰もが常に強い好奇心を抱く上流社

会とその対極をなすスラムという地域のいわば探訪記ともいえるものであり、しかも人間生態学者と知られるマッケンジーが本書の書評のなかで「サイエンティストというよりはレポーターの観点で書かれている」と評するほどの彼のビビッドでリアルな叙述によるものであろう。¹⁵⁾

さて、ゾーボアの『ゴールド・コーストとスラム』はこれまでみてきたように、ニア・ノース・サイドを構成する各地域の生活とその特徴を描くのに、もちろんこの地域での参与観察をはじめとして、驚くほど多種多様なドキュメントと調査技法が使われている。このことは本書の記述においてもある程度伺い知ることできるが、詳しくはシカゴ大学文書館に残されている記録から知ることができる。ゾーボアの調査は1923年から1924年にかけておこなわれており、それは丁度この年に発足したシカゴ大学ローカル・コミュニティ調査委員会（Local Community Research Committee）からの助成資金をうけて行われていた。このローカル・コミュニティ調査委員会は地域コミュニティの研究を主目的にしたシカゴ大学の社会科学分野からなる研究組織であり、その運営はローラー・スベルマン・ロックフェラー記念財団からの基金によって賄われていた。この助成資金を受けると、研究者は3か月ごとにこの委員会に調査の進捗状況を報告する必要があった。このためこのゾーボアの提出した報告書から実際にどんな調査法と調査資料を用いたかを詳しく知ることができる。¹⁶⁾

それではゾーボアの利用した資料をざっと見てみよう。

まずこれらの地区について書かれた書籍。シカゴの地元紙、シカゴ・トリビューンやシカゴ・デイリー・トリビューンなどの新聞記事。国勢調査をはじめとする各種の統計的データ。当時シカゴの社会学徒によって好んで用いられたスポット・マップ。それはアルコール中毒、殺人、強度の精神病、貧困といった特殊な行動の発生した場所をチェックし、人口センサスのデータにもとづいて割合を計算するものである。ゾーボアは本書のなかで、ゴールド・コーストで『紳士録』に名前が掲載されている人たちの住居（図2）や下宿屋と間貸し屋の所有者の所在、自殺者の住居の所在（図1-2）、犯罪で逮捕された成人の居住地、扶養義務不履行の家族の所在地、生活保護を受けている人たちの所在地、非行少年やギャングの居所などのスポット・マップを示している。

次に、住民によって提供されたドキュメントや学校の生徒によって書かれた多数の作文。

本書の冒頭の謝辞でも述べられているように、シカゴ歴史協会（Chicago Historical Society）全米慈善協会（United Charity）、ローア・ノース協議会をはじめとして、イリノイ州間貸し屋登録簿（Illinois Lodging House Register）や、青少年保護協会（Juvenile Protective Association）、といった社会機関の記録やケース・ヒストリー。夜間刑事法廷の記録。

またこの地域に住む古老や有力者、また市当局や社会組織の代表者、無料診療所の看護婦やあるいは既にみたように暗黒街リアルトで質屋を営む主人のようなこの地域の事情に通じた人とのインタビュー記録。日記の利用。上で見た転落した娘（charity girl）の生活史。

さらに、表2-1・2で見られるような調査票によるフォーマル・インタビュー。この調査は貸間住宅に住む人たちの家賃、収入、家族構成を調べるために行われたものであり、それは戸別

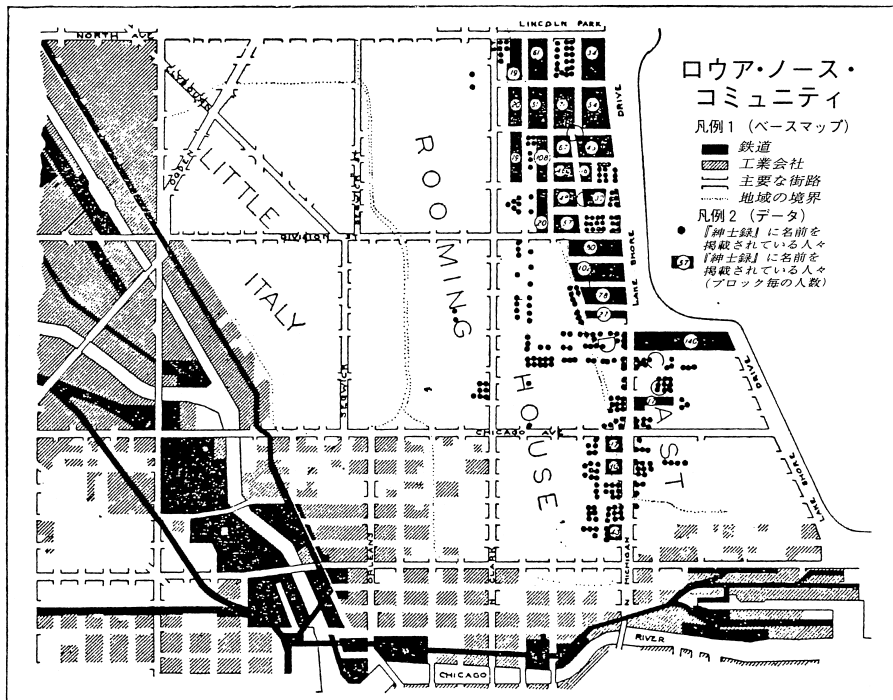


図2 ゴールド・ゴーストで紳士録に名前が掲載されている人たちの住居の所在

ゴールド・コースト

シカゴ社交界は、「ストリーターヴィル」北部の湖岸の主要な街道に沿って集中している。また、ラ・サール、ラッシュ南部、ヒューマン、アペアリア、オハイオそしてキャスといった一世代前の上流の通りに、その少数が散在している。この地図を、「貸部屋の世界」の地図や「リトル・シシリー」の地図と比較してみると、大都市の生活に特徴的な凝離が浮き彫りにされる。この地図および他の地図において、真っ黒になっている部分は、斑点（この地図では、1923年の『紳士録』に名前が掲載されている人々の住居を表している）があまりに多く集まっているため、斑点を個別には示し得ないことを表している。

（ハーベイ・W・ゾーバー『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社 吉原直樹ほか
訳 ハーベスト社 53頁より）

訪問調査（house-to-house survey）によってデータが収集されている。さらに同じ仲間の大学院生によって書かれたモノグラフ、スラッシャー『ギャング』、ショウ『ジャック・ローラー』、アンダーソン『ホーボー』からの引用。

このようにゾーバーはもちろんこの地域での2年間にわたる参与観察や住民とのインフォーマ

表2-1

A. 各建物に関する情報

区画
調査票番号
調査者
調査日

1. 街 _____ 街の様子 _____
 2. 建物の様子 _____ 建築様式 (木造・レンガ等) _____
 3. 何階建て _____ アパートの数 _____
 貸室 _____ 暖房 _____
 4. 家主の名前 _____ 家主の国籍 _____
 5. 家主はこの地区に住んでいるか? _____ 同じ市内に住んでいるか? _____

B. 上記の建築物に居住する各世帯に関する情報

6. _____
 名前 _____ 世帯主の国籍 _____ 父または世帯主の国籍 _____
 7. _____
 どれくらいアメリカに住んでいるか _____ 今の地域社会に _____ 今の家に _____ 宗教 _____
 8. _____
 部屋の数 _____ アパートの様子 _____ 電話 _____ 人数 _____ 1カ月の家賃 _____
 9. _____
 家内工業 _____ 支部 _____ 労働組合 _____ 政治的指導者 _____

10. 家族の地位と職業

家族の一員と下宿人	性別	年齢	現在のまたは 普段の職業	勤務地	最近12カ月に下記の理由 で何週間失業したか		12ヶ月間の 所得	最近12ヶ月間 の使用者の数
					病気のため	その他の理由		
父								
母								
子供:								
1.								
2.								
3.								
4.								
5.								
6.								
下宿人:								
1.								
2.								
3.								

11. 他の所得源 (明示せよ) _____
 12. 昨年の家族の所得の総額 _____ 黒字／赤字 _____
 13. どうやって赤字を埋めたか _____
 14. 救済金, 程度 _____ 支払源 _____
 15. 所有する不動産の価値 _____ 所有する財産上の負担 _____
 16. その他の借金 _____

(所見-裏面)

表2-2

簡易宿泊所に関する調査

- 区画 _____ 調査者 _____
 住所 _____ 記入簿 _____
 下宿人 _____ 部屋: シングルの部屋数 _____ シングルの家賃 _____
 部屋: ダブルの部屋数 _____ ダブルの家賃 _____
 簡易調理施設のある部屋数 _____ 家賃 _____
 満室時の下宿人の数 _____ 現在の下宿人の数 _____
 独身男性の数 _____ 独身女性の数 _____ 既婚夫婦の数 _____
 1年間に宿泊した下宿人の数 _____
 家の所有者はどのくらい現住所にいますか _____
 家の所有者は隣人を知っているか _____ (所見は裏面)

Bulmer, Martin. 1984. *The Chicago School of Sociology*. University of Chicago Press. : 103-104. より作成

ル・インタビューを行っているものの、それにしてもパーソナル・ドキュメントや公的記録など多様で広範でかつ大量のドキュメントを利用していることがわかる。そこではむしろ参与観察の役割は小さく、「都市コミュニティ研究のシカゴ学派を特徴づける参与観察によるフィールド・リサーチのモデルもしくは典型例」だという、これまでの通説は再検討をせざるをえなくなる。¹⁷⁾ このことはシカゴ・モノグラフのなかでもゾーボーと違って、本人自身も調査法として参与観察の使用を明示していることもあって、その代表例として、しばしばあげられるポール・G.クレッシーの『タクシー・ダンスホール』においてでさえもいえる。

参与観察の代表例：クレッシー『タクシー・ダンスホール』

このモノグラフは、当時アメリカの大都市の歓楽街にあだ花のように咲いたきわめていかがわしい娯楽施設を扱ったものである。そこでは客の男性が通例、当時、1曲10セントの料金を払って、若い女性ダンサーと踊ってもらうのである。客が払った料金の半分はホールや曲を奏でる楽団の費用を払う店の経営者に渡し、残りの半分がダンサー本人の手に入る仕組みになっていた。ホールで雇われている女性ダンサーたちは、指名されたらどんな男性客とでも相手になって踊らなければならない。客の男性が支払った料金の分だけの時間、ダンスの相手をするのである。ちょうどタクシーの運転手のように客ならだれとでも相手をし、踊った時間と与えられたサービスに応じて料金が支払われるので、タクシー・ダンスホールと呼ばれたのである。クレッシーがこのタクシー・ダンスホールの調査を行うきっかけは彼がケースワーカーとして、また特別調査員として働いてシカゴ青少年保護協会からこの新奇のしかもその実態が全くわからない男性しか入れない「閉鎖的なダンスホール」について報告をするように求められたことによる。そこでクレッシーは調査に取り掛かることになるが、最初フォーマル・インタビューによって情報を収集しようとしたところ、当然ながらダンスホールの経営者や関係者から全く協力を得られなかった。このためクレッシーはそれを断念し、代ってとった方法が参与観察だったのである。当時まだ参与観察という言葉は一般的なものでもなかったこともあり、彼自身この方法を参与観察という言葉で呼んでいない。そこでクレッシーは自分以外にも仲間の大学院生にも協力してもらい、観察者としてタクシー・ダンスホールに入ってしまったのである。この間の事情について彼は序文で次のように述べている。

彼らは他の人と交わり、倫理的に可能な限りこの社会的世界の一部になるように指図された。彼らはこの施設のなかで出会った人の行動や会話をできる限り正確に観察し記録することを求められた。それぞれの観察者はその人のこれまでの経験、熟練度、特別の才能があるが故に選ばれた人たちなのだ。こうした調査者であったので、どんな人であっても一人ではとうてい集めることができないほど多様な客やタクシー・ダンサーのグループから重要なケース・マテリアルを集めることができた。調査者は匿名のストレンジャーと偶然の知り合いとして機能した。こうして彼らはこの資料をフォーマル・インタビューで通例遭遇する忌避や抵抗を受けることなく手に入れることができた。さらにそれぞれ異なる観察者が同一人物に別々に接触して彼のことを報告するので、そうすることで入手された資料の一貫性をチェックすることができた。またさら

に客やダンサーに関するこうした情報によって、社会機関の記録から多くの補助的な資料を得ることができた。¹⁸⁾

この記述にもあるようにクレッシーの参与観察による調査は、その多くを彼の勤務していた青少年保護協会のケース・レコードが利用されている。そこでは参与観察で得た結果と1番から57番まで番号が振られたケース・レコードとの照合が主になっている。またそのほか店の経営者やダンサーやそこに来る客とのインフォーマル・インタビュー、あるいはダンサーに依頼して書いてもらった生活史、さらにはダンスホールの所在を示すドット・マップなど多くのドキュメントも利用している。このようにクレッシーの調査は確かに参与観察が使われているものの、そこでは観察者自身による記述がもとになっているというよりは、むしろ参与観察が客やダンサーから話を聞き出したり、入手したデータをチェックしたりするためのいわば補助的役割として用いられている。こうしたことからクレッシーのモノグラフは参与観察の典型とか代表とみるよりは、むしろそれを中心にしてインフォーマル・インタビューや各種のドキュメントを併用してタクシー・ダンスホールの社会的世界を鮮やかに描きだした作品とみるべきである。

こうしてみるとデータ収集の技法としての参与観察が、しばしばシカゴ学派社会学の最大の特徴だとする従来からの見方は、確かにハーベイの主張するように「神話」だということになる。この点についてハーベイは『シカゴ学派社会学の神話』のなかでつぎのようにいう。

1920年代の「黄金時代」でさえ参与観察は盛んだった時期ではなかった。1915年から1950年の間にシカゴ大学社会学部に提出された博士論文をランダムに42篇選んで、それらを詳細に検討した結果、そのなかでわずかに2篇（5%）だけが完全参与観察を利用したもので、しかもこの2篇とも1940年以降のものであり、6篇（14%）がある種の部分的参与観察をもちいたものである。他の7篇（17%）がその時々観察を用いているが、それらは過去の個人的な関わり合いに依存したり、他の観察者からの事後報告を用いたものである。そのほとんどの3分の2（64%）が技法としての観察を利用していない¹⁹⁾

このようにシカゴの社会学研究者によって書かれたシカゴ・モノグラフにおいて参与観察だけを使って書かれたモノグラフも案に相違して少なく、しかも参与観察が使われてもその役割は意外と小さくことがわかる。こうしたことからシカゴ・モノグラフにみられる調査法は、各種データ収集の技法を組み合わせる調査対象にせまる多角的方法だとして見た方がよい。

このことはこれまで見たゾーボの『ゴールド・コースト』やクレッシーの『タクシー・ダンスホール』といったエスノグラフィーだけでなく、フィールドワークを伴わないモノグラフについてもいえる。そうしたもののひとつとしてマウラー『家族解体』を取り上げて見てみよう。

フィールドワークを伴わないシカゴ・モノグラフ：マウラー『家族解体』

1927年に出版されたマウラーのモノグラフ『家族解体』も、もちろん1924年にシカゴ大学に提出した博士論文が下敷きになっている。しかし彼の関心は1921年に書いた修士論文、「裁判記録か

ら見た離婚の法的根拠と家族崩壊の自然原因との間の差異の研究」以来、一貫して家族、それも家族内の人間関係の「緊張」にあった。それは具体的には離婚、別居、遺棄、虐待などといった家族解体という現象を引き起こすことになる。マウラーはこうした家族解体の「崩壊の程度、歴史的趨勢、原因」を明らかにしようとして、「統計的方法」と「ケーススタディ」というまさに量的方法と質的方法の両面からその実相に迫ってゆく。

そこではまず、イリノイ州クック郡の巡回裁判所と上級裁判所の統計的データを利用してシカゴにおける離婚の検討から着手する。このシカゴの離婚統計の分析してゆくなかで、マウラーは離婚の「自然的原因」(natural causes) と「法的原因」(legal causes) とがしばしば大きく食い違っていることを明らかにする。つまり離婚は家族意識が崩壊したことの州による公式の承認に他ならず、各州が認められる原因を規定している。それは例えば姦通であり、遺棄であり、虐待である。すべての離婚事例は、法律上、このような違反として示される。これが法的原因である。ところが離婚記録を調べると、このような「表向きの原因」は離婚に至らしめる溝を作った本当の原因ではないことがはっきりと示される。例えば、離婚の法的原因としてもっとも頻度が高いものは遺棄である。こうした遺棄を法的原因とする事例は、経済的問題、第三者のための遺棄 (disertion for and living with another)、家庭あるいは結婚生活にたいする不満、不貞、飲酒および虐待などの自然的原因を背景にもっているという。このように「法的原因是崩壊した関係を覆い隠すために、適切で便利であるという理由で選ばれる<タテマエ>として示される」のである。このような表向きの原因の陰に隠れた本当の理由が「自然的原因」なのだ、という。そこで彼は離婚の本当の原因を見極めるために、子どもの有無、性別、数と離婚との関係を分析して行く。こうしたなかで例えば子供は離婚をとどめる要因となるかどうか、その真偽を検討する。その際注目されるのは、当時ではまだ珍しい有意差検定を用いている。つまり子供の有無と離婚の法的原因という変数に例えば離婚の申立人が夫か妻かという第3の変数を導入して有意差を検定している。

次いでマウラーは家族解体の指標となるもうひとつの形態である遺棄について、シカゴの慈善団体と家庭裁判所の統計的データを利用して分析を進めて行く。そこでは、遺棄に及ぼす要因を見るために、民族 (nationality)、夫婦間の民族の異同、子供の性別および人数、結婚期間、宗教、夫婦間の宗教の異同といった変数相互の関係を分析する。こうした遺棄に関する統計的分析を通して、例えば「遺棄の統計で使われる原因は根本的なものなのか、それともより根本的な要素の兆候にすぎないのか」、「遺棄を解釈する際に行政的な概念としての遺棄の定義の変化を考慮にいろることができない」とか「あるいは「民族や子供の数、宗教などの配分を比較する対象が不適當」などといった問題点を指摘する。このように遺棄の統計的分析だけでは不十分だと感じたマウラーは家族解体の人間生態学的分析に着手する。マウラーの『家族解体』のなかでもっともよく知られている個所である。

そこではマウラーは家族生活の違いによってシカゴを (1) 非家族地区：都心商業地区とそれに隣接する地域で単身の男性が多く住む地域 (2) 自由家族地区：フェミニズムが憎悪してきた因習から自らが自由になっていると思っている。このタイプの家族の特徴は子供がいない。近所付き合いは表面的無頓着。たいてい夫婦共稼ぎで、それぞれ関心は家庭外にある。(3) 父親中

心家族地区：労働者家族と移民の住む地区。夫が家庭において優位である。ゲッターやリトル・シシリーなど安アパートと移民居住区に特徴的である。(4) 平等主義家族地区：中流・専門職階級の住む地区。(5) 母親中心地区：夫がグループに勤めていてほとんど家に居ないため、妻が自然と家族の長になりがちである、という5つの地区に分類する。これらの地区は都市の内部にランダムに点在するわけではなく、「シカゴのような規模の都市では同心円状に理念化された形をとる」というのである。そこでマウラーはそれらの地区を指導教授のバージェスの提唱した同心円モデルに位置付けたのが図3である。さらにマウラーはこれまでの統計的分析で用いたシカゴの巡回裁判所、上級裁判所、および家庭裁判所の離婚および遺棄のデータからその申立人の住所がわかる全事例について図4にみられるように図1-1の「シカゴの地域コミュニティ」の地図上にプロットしていった。これが家族解体の分布の指標になるというのである。こうしたスポット・マップは「1920年代シカゴではスポット・マップを書くことなしに学位をとることは難しかった」と後年マウラー自身も回想しているように、シカゴ・モノグラフにみられる特徴である。²⁰⁾

こうした人間生態学的分析によって、シカゴという都市のなかでも当時70ものローカル・コミュニティが、家族解体の状況に関してそれぞれ異なった特徴をもつこと、またそれらが生態学的に一定のまとまりをもった地域に類別されることが示されたのである。さらにこのような離婚・遺棄の分布と先にみた家族類型の分布とが相関することも明らかにされた。だが、それにもかかわらずマウラーは、そこに家族解体に関する統計的分析の限界を次のように見た。

こうした統計は常に個人の行動に関して、計数や測定しやすい外的な特徴に限られる。それ自体では婚姻関係におけるパーソナリティの相互作用という現象を直接扱うことはできない。しかし、夫と妻、親と子供こうした態度の相互作用を記述し、説明することこそが家族についての社会学的研究の主要な目的なのである。²¹⁾

マウラーはいう。統計的データは家族解体の崩壊の程度と歴史的趨勢を明らかにするには確かに有効である。しかし家族解体の原因を明らかにするととなると、夫婦それぞれの行動、さらには両者の相互作用のダイナミックな過程に踏み込んでいかなければならない。だがそれは統計的データの射程の範囲をはるかに越えている。

こうしたことから、マウラーは家族解体の「ケーススタディ」、すなわち質的分析に入ってゆくのである。そうすることによって、はじめて離婚に至る夫婦間の生々しい相互作用の過程を描き出すことができると考えたのである。

こうしてマウラーは家族解体のケースとしてミリアム・ドノヴァンという名の女性の書いた日記を利用する。日記を利用した理由として、彼は次のように述べている。

「詳細でかつ正確な分析に使えるようなドキュメントというものは入手が困難な上に、大部分が表面的である。しかしそのなかで比較的良い考察を引き出せるのは日記、自伝、手紙などのナイーブなドキュメントであり、とりわけ日記が現段階で最良のメディアであるから」だという。²²⁾

この日記は、彼女が19歳で1つ年上の夫アルフレッドと結婚してから7週間目の12月から数年後までの間の、自らの思いを綴ったものである。それが入手できたのはこの最後の日に彼女が起こした心中事件の証拠として押収されたことによる。

マウラーはまずこのドノヴァンという女性の書いた日記を21ページにもわたって紹介する。そ

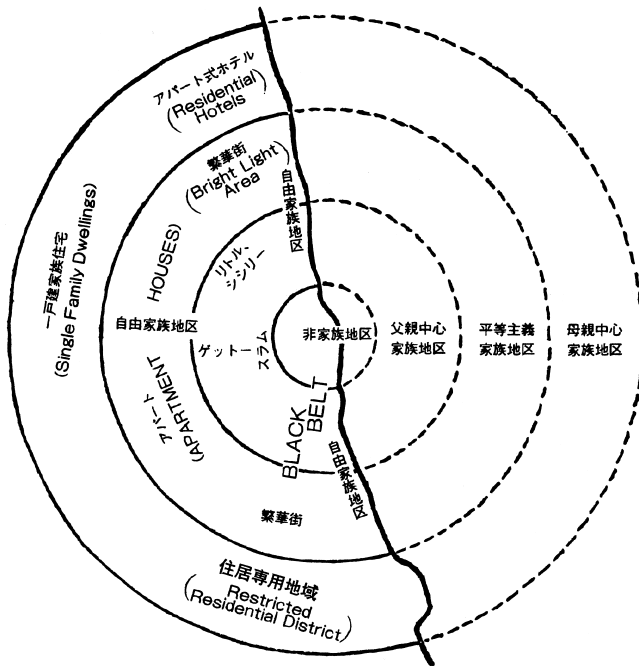


図3 シカゴの家族地区
(1920年)

Ernest Mowrer, Family
Disorganization, 1927, p.113

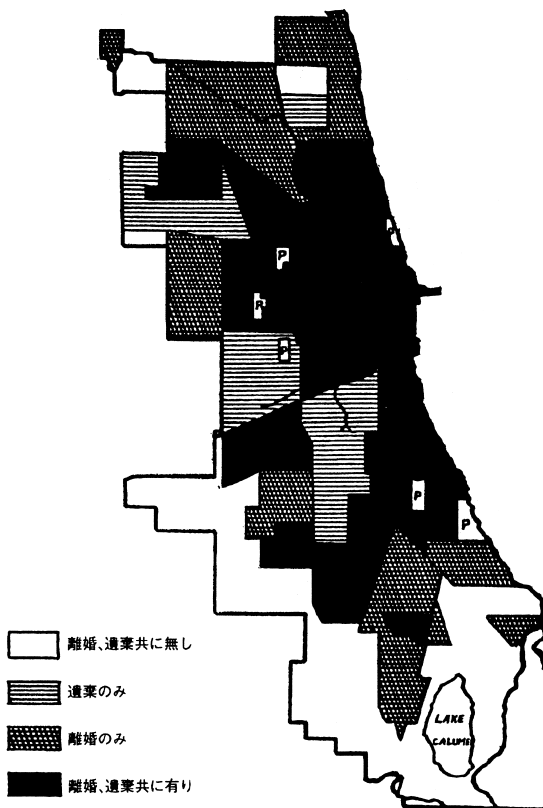


図4 シカゴにおける家
族解体

Ernest Mowrer, Family
Disorganization, 1927, p.123

うした上でこの女性ミリアムと夫アルフレッドのそれぞれの子供時代からの様子から二人の出会い、そして結婚にいたるまでの社会的背景を描写する。こうするなかでコミュニティの影響と圧力の変化がこのドノヴァン夫婦の結婚の崩壊をどのように助長させたかを示す「生態学的」解釈を試みる。次いでこの夫婦の間の葛藤を出来事の因果連鎖の形に概念化し、最後にトマスが『ポーランド農民』で行ったのと同じように、「態度」と「価値」の観点から解釈して行く。このようにしてマウラーは統計的分析では射程の及ばなかった家族解体の原因を浮き彫りにしていった。彼自身冒頭で「統計的分析を理解して初めて、ケーススタディによって得られる問題のより一層生き生きとした理解を十分に楽しむことができる」と指摘しているように、統計的データによる分析の問題点を明らかにすることによってケーススタディの重要性を際立たせている。つまり統計的方法を慎重かつ厳密に用い、出来る限りの分析を試みた上で、それが家族解体における夫婦の相互作用を描きだすのに限界をもつことを指摘する。これで日記に書かれた夫婦の相互作用の生々しさが際立つことになるのである。このように、マウラーは統計的方法＝量的方法とケーススタディ＝質的方法を巧みに組み合わせることによって離婚と遺棄という生々しい現象である家族解体を鮮やかに描き出した。そしてこのマウラーをみても明らかなように、そこでは量的方法と質的方法は対立するものではなく、相互補完的關係にあるものとして考えられていることがわかる。²³⁾

シカゴ・モノグラフにおける調査法の特徴

これまでシカゴ・モノグラフのなかでもエスノグラフィーの典型例といわれるゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』と参与観察を用いた代表例といわれるクレッシー『タクシー・ダンスホール』、そしてフィールドワークをとまなわないモノグラフ、マウラー『家族解体』を取り上げて、そこで用いられた調査法を中心に見てきた。そこではすでに判明されたように、ただひとり参与観察だけでなくインフォーマル・インタビュー、日記、生活史、自伝をはじめとするパーソナル・ドキュメント、社会機関からの各種の記録や新聞記事などのパブリック・ドキュメントを駆使して主題に迫る多角的方法とでも呼べる調査法が用いられていた。

これらのシカゴ・モノグラフで使われた調査法を見てわかることは、彼らの指導にあたったパークとそしてシカゴ大学をパークと入れ替わるように去ったトマスの『ポーランド農民』からの影響の大きさということである。

パークが考えていた調査法は当時人類学で用いられていた方法であった。このことは彼の次の指摘のなかによくあらわれている。

ボアスやローウィというような人類学者が、北米インディアンの生活や習俗の研究に費やしたと同じくらい辛抱強い観察の方法が、シカゴのノース・サイドのリトル・イタリーで広く一般に行われている慣習や信仰や社会的慣習や生活に対する一般的な考え方などについての研究に用いられるならば、よりいっそう稔り多いものになるであろうし、またニューヨークのグリニッジヴィレッジの住民やワシントンスクウェアの近隣に見られるさらに悪化している習俗を記録するさいに用いられるならば、これまたいっそうの稔り豊かな

ものになるであろう。²⁴⁾

パークが調査法としてこうした観察法やインフォーマル・インタビューといったフィールドで用いられる方法を重視した背景には、彼の11年間に及ぶジャーナリストとして経歴といまひとつは、当時人類学が社会学と同一の学部であり、人類学者で彼の娘婿でもあるロバート・レッドフィールドとの緊密な共同研究に従事していたということがあるといわれる。

このようにパークから人類学的方法というよりはむしろジャーナリストの取材のやり方を学んだ若き社会学徒は、モノグラフを書く際にトマスとズナニェツキの記念碑的業績といわれる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』を範例にしている。というのは上で見たようにいずれのモノグラフも広範なドキュメント、とりわけヒューマン・ドキュメントと呼ばれる日記や生活史などパーソナル・ドキュメントを利用しているからだ。²⁵⁾

トマスは全5巻2200頁にも及ぶその著作のなかで、ポーランド農民がいかにして社会解体を克服して、新しい環境に再調整ゆくかを究明するのに膨大な量のドキュメントを収集し、それを資料として利用した。彼の利用したドキュメントは大きく次の5つのタイプに分けられる。(1) 手紙 (2) 生活史 (3) 新聞記事 (4) 裁判記録 (5) 各種の社会機関の記録、である。これら5種類のドキュメントのうち (1) の手紙と (2) の生活史は、ある個人が自分自身の行為、経験、信念について自発的に第一人称で語っているという意味で、「パーソナル・ドキュメント」と呼ばれ、それはすぐれて主観的な性格をもつドキュメントである。それに対して新聞記事、裁判記録、社会機関のドキュメントは第三者の手による報告や記録であり、いわば公的な性格をもつドキュメントである。これらのなかでもトマスは特に (1) と (2) のパーソナル・ドキュメントを重要視し、次のように力強く主張したのである。

個人の生活記録をできるだけ揃えれば、それは「完璧な」社会学的資料となると言えよう。だから社会科学がやむをえず他の資料を使わざるを得ないのは、社会学的問題の総体を覆い尽くすことができるような記録を、その時々実際に問題として十分得ることができないという理由と、社会集団の生活の特徴付けに必要な個人的な資料をすべて適切に分析するには莫大な労力が必要だという理由があるために他ならない。仮に大量現象を資料として、またある出来事をそこに参加した諸個人の生活史と関係なくやむをえず使っているとすれば、そのことは現在の社会学的方法の欠点であっても利点ではない。²⁶⁾

こうして見るとシカゴ学派はトマスの『ポーランド農民』によって形が与えられ、²⁷⁾ パークによってその中身が、ただ単にドキュメントの利用というだけでなく、徹底したフィールドワークによるデータの収集という内容に充実されたものだといえよう。

おわりに：シカゴ・モノグラフにおける調査法の問題点

こうしたシカゴ・モノグラフのなかで用いられた調査法に対してこれまでいくつかの批判が寄せられてきた。そうしたものとして、パークが学生に指示したほど、第一次資料がそれほど使わ

れていないというもの。つまりそこで用いられた多くの資料は他人によって収集されたもので、しかも彼らの貢献が軽視されているという指摘がある。²⁸⁾ こうしたなかで多く寄せられている批判として、そこで用いられたデータについての方法論的論議がほとんどなされておらず、それどころかまったく無自覚で無頓着だという批判である。そのうえデータの扱いもきわめて杜撰だという批判も寄せられている。²⁹⁾ このことはゾーボアの『ゴールド・コーストとスラム』においてもいえる。そこでは収集されたドキュメントが(1)の「ファergus歴史叢書の編集者ロバート・ファergusとのインタビュー記録」から(73)の「シカゴで最大の法律事務所のひとつに勤める上級所員とのインタビュー記録」までそれぞれ数字が付されて引用されてが、それらの出所が明示されていないので、データとしての信憑性がいまひとつ定かでない。確かに現在の調査研究においてはそこで用いられた調査法やデータの出所について明示されるのが常識である。

だが、どのシカゴ・モノグラフにおいてもこうした調査方法論について注意が払われていないのは当時の社会調査法が未発達だったということがいえる。この点についてはイギリスの社会調査論の研究者、プラットがアメリカにおける社会調査法の歴史を丹念に考察しているなかで、社会調査のテキストや方法論に関する著作がこの時代まだほとんど出版されていなかったことを示している事実からも明らかである。³⁰⁾

ところが、こうしたなかで1928年、同じシカゴ大学からヴィヴィアン・パーマー『社会学におけるフィールドスタディ』(Vivien M. Palmer, Field Studies in Sociology)が出版されている。本書はバージェスが序文を書いているように、彼の指導のもとに書かれたものである。副題に「学生のためのマニュアル」とあるように、学生を対象にしたテキストであり、「グリーン・バイブル」と呼ばれ、いわばシカゴ学派の「マニフェスト」ともいえるパークとバージェスの『科学としての社会学入門』(Introduction to the Science of Sociology)を基礎として書かれている。本書は4つの部分から構成されている。第一部では社会調査の目的、方法、基礎となる仮定など、社会調査に関する基本的な考え方が示されている。パーマーは当時社会学的調査研究で用いられていた主な方法として(1)ケーススタディ法(2)歴史的方法(3)統計的方法の3つを挙げているが、本書の第一の目的がケーススタディ法の応用だと述べているように、これら3つの方法のなかで、ケーススタディ法をもっとも重視している。第二部では3つのタイプのケーススタディの概要が示されている。まず社会集団をその機能の点から「地域集団」(territorial group)、「利害集団」(interest group)、「移民集団」(immigrant group)というタイプに分け、それぞれのタイプの社会的特徴を概説し、それぞれのタイプを実際に調査する前に準備しておくべき事柄を「課題」という形で提示している。第三部では、第二部と対応させながら調査で実際用いる技法について解説している。ここで見られる技法は「インタビュー」や「日記」、「社会調査地図」など当時のシカゴ学派の社会調査の特徴をよく表している。そして最後に付録として、実際にシカゴで行われた3つのタイプのケーススタディの抄録が掲載されている。このなかで注目されるのは、当時まだ馴染みのなかった「参与観察」という言葉を「利害集団の集中的研究をする際に不可欠だ」ということで用いていることである。この参与観察という言葉は1924年、リンドマンが彼の著書『社会的発見』(Social Discovery)のなかで初めて用いたといわれている。ただし、ここでパーマーがいう参与観察という用語はリンドマンがこの言葉にこめた意味と少し違って

る。パーマーによればこの用語は（１）個人が単にある集団を研究する目的のために自分がその集団と同一化している、（２）その人は本当にある集団の一部であるか、客観的に私心なく研究している、という意味である。パーマーの社会調査のテキストにおいていまひとつ目を引きつけるのは調査技法を扱うなかで、観察、インタビュー、社会調査地図とならんで日記やドキュメントの利用（documentation）を重視していることである。ここにおいてもこれまで見てきたように各種のドキュメントを駆使した『ポーランド農民』と、その影響によるシカゴ学派の特徴が強く表れていることがよくわかる。

こうしたパーマーのテキストが出版されているにもかかわらず、シカゴの若き社会学徒が調査でデータをどのように用いたのかについてほとんど情報を明らかにしていないのは確かに皮肉なことである。³¹⁾

しかしこのパーマーのテキストは「社会調査」に対象を絞ったものとしてはアメリカでもっとも古いものの１つであるという。また参与観察という言葉もまだ一般的ではなく、オグバーンやストッファーなどによって開発されて行く統計的研究法もまだ十分定着していない時期の出版である。プラットのいうようにこの1920年代はまだ調査法のもつ真価がはっきりと確立されていない時期であったということを考えればやむをえないことであろう。³²⁾

これまで見てきたシカゴ・モノグラフで駆使された多角的調査法は、いわばいろいろな角度から調査対象を照射するものであり、一方向だけで光を当てたものよりはっそう鮮明に調査対象となる社会的世界を浮き彫りにすることができる方法だといえる。そのため、こうした方法論の問題をはらんでいるとはいえ、多角的調査法によって描かれたシカゴ・モノグラフは、リアルで臨場感あふれ、そこでの人々の息遣いが聞こえてきそうな社会的世界を浮かび上がらせており、時を経た今なお読む人をひきつけてやまないものである。

注

- 1) Faris, Robert E. L., 1967, *Chicago School: 1920-1932*, The University of Chicago Press. (= 1990、奥田道大・広田康生訳、『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』ハーベスト社）（訳120～124頁）
- 2) Deegan, Mary Jo, 2001, "The Chicago School of Ethnography", Atkinson P., Coffey, A., Lofland, J. and Lofland, L. eds., *Handbook of Ethnography*, Sage Publication, pp.11-25.
- 3) 中野正大、2006、「シカゴ・アプローチ：マウラー『家族解体』にみる」中野正大編、『現代社会におけるシカゴ学派の応用可能性』、科学研究費補助金研究成果報告書
- 4) Shils, E. A., 1948, *The Present State of American Sociology*, The Free Press.
- 5) Suttles, Gerald, 1976, "Urban Ethnography", *Annual Review of Sociology*, 2:1-18.
- 6) Zorbaugh, Harvey Warren, 1929 *The Gold Coast and Slum*, The University of Chicago Press. (= 1997、吉原直樹ほか訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社）（訳44頁）
- 7) 前掲訳63頁
- 8) 前掲訳87～94頁
- 9) 前掲訳112～114頁
- 10) 前掲訳140頁

- 11) 前掲訳160頁
- 12) 前掲訳172～173頁
- 13) 前掲訳175頁
- 14) 前掲訳186～186頁
- 15) McKenzie, R.D., 1929, " Book Review, AJS, 35 (3) :486-487.
- 16) ローカル・コミュニティ委員会については高橋早苗,2004,「初期シカゴ学派とフィランソロピー」宝月誠・吉原直樹編『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣、およびBulmer,Martin,1984,The Chicago School of Sociology,chap.8.参照
- 17) Hunter, Albert,1983, " The Gold Coast and Slum Revisited" , Urban Life, 11 (4) : 461.
- 18) Cressey, Paul G., 1932," Author' s Preface" , The Taxi-Dance Hall, The University of Chicago Press.なお『タクシー・ダンスホール』の詳しい紹介については中野正大・寺岡伸吾、1994・1995・1996、「初期シカゴ学派の調査方法論（上）・（中）・（下）」『人文』京都工芸繊維大学工芸学部研究報告、42・43・44号を参照。
- 19) Harvey, L.,1987, The Myth of the Chicago School of Sociology, Avebury.p.56.
- 20) Bulmer, M,1984, The Chicago School of Sociology, The University of Chicago Press.p.155
- 21) Mowrer, Ernest, 1927, Family Disorganization, The University of Chicago Press.p.127.
- 22) ibd.p.230. なおマウラーの『家族解体』の詳細については中野正大・中里英樹、1995、1996、「シカゴ学派の調査研究のひとつま：アーネスト・マウラー『家族解体』（上）・（下）」、『人文』、京都工芸繊維大学工芸学部研究報告、43号・44号を参照。
- 23) このことはマウラーの『家族解体』と同様、量的方法と質的方法を併用して書かれたモノグラフ、『自殺』の著者キャンバンも指摘している。Cavan, Ruth Shonle, 1983, " The Chicago School of Sociology, 1918-1933," Urban Life, vol.11,No.4 January. 参照。
- 24) Park, Robert E.,1915,"The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment" , AJS, 20, pp. 577-612 (=1972、大道安次郎・倉田和四郎訳、『都市』、鹿島出版会、3頁。
- 25) 中野正大、1989、「ドキュメントを用いた調査の事例：『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』、宝月誠ほか編、『社会調査』、有斐閣、227～249頁。
- 26) Thomas, W. I. & Znaniecki, F.,1918~20.The Polish Peasant in Europe and America. (=桜井厚訳、1983、『生活史の社会学』お茶の水書房、88～89頁。
- 27) Cavan, 1983, op cit., p.111.
- 28) Platt, Jennifer, 1994, "The Chicago school and firsthand data" , History of The Human Sciences, vol. 7, No.1, pp.57-80.
- 29) Hammersley, Martyn, 1989, The Dilemma of Qualitative Method, Routledge, Routledge, chap.3. および Madge,John, 1962, The Origins of Scientific Sociology, Free Press, chap.4.
- 30) Platt, Jennifer, 1996, A History of Sociological Research Methods in America 1920-1960, Cambridge University Press.
- 31) Hammersley, Martyn, op cit, p.84.
- 32) Palmer,Vivien, 1928, Field Studies in Sociology, The University of Chicago Press.については中野正大・丸木泰史,2002・2003、「初期シカゴ学派における社会調査の考え方（上・中）」『人文』京都工芸繊維大学工芸学部研究報告50号・51号を参照。

参考文献

- Andersson, Nels, 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*, The University of Chicago Press. (= 1999、広田康生訳『ホーボー』ハーベスト社)
- Bulmer, M. 1984, *The Chicago School of Sociology*, The University of Chicago Press.
- Cressey, Paul, G., 1932, *The Taxi-Dance Hall: A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*, The University of Chicago Press.
- Cavan, Ruth, Shonle, 1983, "The Chicago School of Sociology, 1918-1933," *Urban Life*, vol.11, No.4, January.
- Faris, Robert, E. L., 1967, *Chicago School: 1920-32*, The University of Chicago Press. (= 1990、奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー：1920-1932』ハーベスト社)
- Deegan, Mary, Jo, 2001, "The Chicago School of Ethnography", Atkinson P., Coffey, A., Lofland, J., and Lofland, L., eds., *Handbook of Ethnography*, Sage Publication.
- Hammersley, Martyn, 1989, *The Dilemma of Qualitative Method*, Routledge.
- Hannerz, U., 1980, *Exploring the City*, Columbia University Press.
- Harvey, Lee, 1987, *The Myth of the Chicago School of Sociology*, Avebury.
- Hayner, Norman, S., 1936, *Hotel Life*, The University of Chicago Press. (= 1997、田嶋淳子訳『ホテル・ライフ』ハーベスト社)
- Mowrer, Ernest, 1927, *Family Disorganization*, The University of Chicago Press.
- Palmer, Vivien, 1928, *Field Studies in Sociology*, The University of Chicago Press.
- Platt, Jennifer, 1996, *A History of Sociological Research Methods in America 1920-1960*, Cambridge University Press.
- Suttles, Gerald, 1976, "Urban Ethnography", *Annual Review of Sociology*, 2:1-18.
- Zorbaugh, Harvey Warren, 1929, *The Gold Coast and Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*, The University of Chicago Press. (= 1997、吉原直樹ほか訳、『ゴールド・コーストとスラム』、ハーベスト社)
- 中野正大編、2001、『シカゴ学派の総合的研究』、科学研究費補助金研究成果報告書
- 中野正大・宝月誠編、2003、『シカゴ学派の社会学』、世界思想社
- 中野正大編、2006、『現代社会におけるシカゴ学派社会学の応用可能性』、科学研究費補助金研究成果報告書
- 宝月誠・中野正大編、1997、『シカゴ社会学の研究』、恒星社厚生閣
- 宝月誠・吉原直樹編、2004、『初期シカゴ学派の世界』、恒星社厚生閣、

付記 本稿は平成23年度科学研究費補助金（研究代表者 中野正大）（基盤B：社会学的モノグラフ研究の復権——シカゴ学派からの出発 課題番号：22330163）による研究成果の一部である。

Summary

The paper is to consider about the research methods which were used in the Chicago monographs. Among the monographs, *The Gold Coast and Slum*, by Harvey Warren Zorbaugh, published in 1929, which deals with the district of central Chicago known as the "Near North Side" is taken as a representative example of multi-methods. Secondly, *The Taxi-Dance Hall* by Paul G. Cressey is taken as a typical example of participant observation study. Thirdly, *Family Disorganization* by Ernest Mowrer is taken as an example of

the monographs which is not involved in a field study.

Finally the methodological problems in the Chicago monographs are examined.